

社 会 科 学 ノ ー ト

——(1) 研究の意義——

辻 岡 正 己

(一) 現代の諸問題

現代は壮大なる過渡期の時代で世界は人類史上未だ例を見ない程急激に転換しつつあり、「耳をすませば、世界史の奔流の地鳴りがひびいてくる。瞳をこらせば、フル・スピードで展開される歴史のドラマが見える。」¹⁾ その規模は地球を覆いその速さは怒濤の如く、まさに人類は世界史上最大の試練期に直面している。「科学時代」「原子力時代」「宇宙時代」等と呼ばれる人類の歴史を、地球をゆする科学技術の嵐の如き発展に伴う技術革新によってオートメ化された生産力は飛躍的に増大し、産業を、労働を、更には社会生活の様式や意識をも変えさせ、これに照応して社会機構もプラス、マイナス両面の諸現象を織り込みながら複雑に、大きく変容を遂げつつある。それだけに現代は激動の時代であり、戦争か平和か、資本主義か社会主義か、更に組織と個人、人間の主体性と機械、その他の諸問題も山積しており、国内的にも世界につながる問題の外に、民主主義が一応定着しつつあるとはいえ新旧価値体系の矛盾葛藤による両世代の根強い摩擦を始め政治的、経済的、社会的諸問題が経済の高度成長のマイナスの面と関連して多数発生し、これらは日を追ってますます緊急を要する大問題となってきた。²⁾

人類が今日一大岐路に立っている最大の問題は人類を共滅から救い、世界を共通の幸福な花園に変え得るか否かという平和の問題である。第二次大戦までは地球上の1点にすぎなかった社会主義が大戦後は世界人口のうち約3分の1を占める10か国余の一大陣営を形成するに至り、世界地図を塗り変えたばかりか、資本主義陣営の包囲網を無価値にし、その勢力は資本主義陣営に互角に対峙するというより、寧ろ現代世界史の主導者の地位に立った感がある。両陣営の「力の均衡」は一応「平和共存」を可能にして、競争は「宇宙開発」、「国内経済発展」、「低開発諸国経済開発援助」等の面で展開されているが、両陣営共に夫々の「社会機構」の権威を盾に懸命に争っているだけに、平和が強く叫ばれながら現実はずいぶん理想通りに動いていない。ベトナム戦争にしてもますます泥沼にはまりつつある様相を呈しているが、これについては遠からず世界の歴史が裁判官の役割を果たして審判を下すであろう。人間の叡智は人類の滅亡を招くが如き愚は犯さないと思ふが、併しかって1945年8月6日、9日に広島、長崎両市に人類史上初の原爆投下が行なわれ、両市民は言うに言われぬ悲惨な地獄の苦しみを経験し、しかも22年経過した今日尚その傷痕は大きく尾を引いている厳然たる事実がある。戦争に核兵器が使用されず、何人も閃光の洗礼を受けないという保証はどこにもない。現代の戦争は政治的には自己の陣営に反抗する世界の人民を地上から抹殺することも可能な大量殺戮の民族絶滅戦争であり、人類共滅戦争である。³⁾ 物質文明の発達に比較して、いかにも「世界精神の歩みは緩慢である。」(ヘーゲル)⁴⁾ パートランド・ラッセル卿が人間の頭は恐ろしく進んだけれども人間の

1) 長州一二「現代社会の諸問題—総説」(高島善哉・水田洋・長州一二編「社会科学新事典」所収3頁)

2) 同上「社会科学新事典」

上原専祿・古在由重、他「現代の問題性」(岩波講座「現代」2)

大河内一男・貝塚茂樹・永井道雄監修「事典現代を考える」

社会思想社編「現代の焦点」

3) 「現代の戦争」(岩波講座「現代」7)「科学・技術と現代」139頁以下(岩波講座「現代」2)

4) 船山信一「古典と読書」(末川博、他「社会科学への道標」30頁から引用)

心の方は釈迦、孔子、キリスト等の昔と寸毫も変わっていないと嘆くのも至極当然のことといえよう。⁵⁾

軍縮問題にしても1952年1月軍縮委員会が発足して以来、軍縮交渉の努力が続けられて既に久しいものがあるが、容易に一致点に達しないのである。ソビエトからすれば帝国主義は経済的理由から必然的に侵略してくるといい、又アメリカから見れば社会主義は世界共産化を画して必ず侵犯してくるとい、いわば両国の不信感の故もあるが、同時に特に資本主義社会では急速に軍縮がなされた場合必然的に不況を招来し、大量の失業者を路上に投げ出す恐れがあると一般的に信じられている故もある。⁶⁾核兵器については1963年7月地下実験を除く部分的核実験停止（大気圏外および水中での核実験停止）条約が調印された。それにも拘らず今日ますます核装備は充実、拡大の一途を辿っているのである。⁷⁾更に世界の平和と安全、人類の進歩と幸福を理想としている国連も、その存在価値は十分認めねばならぬにしても、現代の世界が余りにも現実をむきだしにしているために、こと平和に関する限り決定的な有効性はない。かつて国連事務総長のウ・タント氏が国連が平和実現の任を果し得ないことを苦慮して、その職を辞任したいと申し出たことは記憶に新しいところである。

（二）全体科学の要請

現代の激動する情勢の中での世界的、国内的諸問題は切実にして急を要するものが多く、しかも個別科学なる専門的社会諸科学によっては容易に緩和、解決し得ないものが少なくない。そのため人々の既成社会諸科学に対する信頼感は失われつつあり、同時に不安は募る一方である。人々の痛切な願いや要求を叶え不安を解消するには最早や社会諸科学の共通の広場としての統一科学なる全体科学＝社会科学の力に俟つ外はない。⁸⁾「共通の広場がほしいという気持は、社会的人間の危機の意識を反映するものである。」⁹⁾危機意識

5) 末川博「青年に訴う」（末川博・大河内一男・他「現代青年に訴う」所収9頁以下）

「末川博との対話」（末川博・桑原武夫・湯川秀樹「現代の対話」所収182頁以下）

末川博「胸に自信と誇りを」（南原繁、他「青年はどう生きるべきか」所収181頁）

人類は常に進歩し前進を続けているから絶望、諦観は不要である。併し人類の進歩も不断的努力の集積によってなされていることを忘れてはならない。

6) 社会思想社編、前掲書41頁以下 安藤慎三「ベトナム特需」

7) アメリカは資本主義陣営を結集して中華民国との関係、その他政治的理由等から一貫して中共を政治的、経済的に国際社会から孤立させるべく封じ込め政策をとってきた。中共にとってアメリカは実に不具戴天の仇である。中共とソビエトの友好関係が悪化すればする程中共は自力で自国を防衛する目的で、必死に核兵器を開発せねばならぬ。目を見張るが如きその開発の早さは勢いアメリカの核兵器の一層の充実、拡大を余儀なくさせる。かかる諸事情はソビエトの核装備にも影響を与えずにはおかぬ。世界平和への最短距離は中共を世界の仲間として心良く国際社会の一員に迎え入れることにあるが、過去の経緯からしてアメリカは友邦国に働きかけてあくまで中共の国連加盟を阻止するであろうし、中共も今になっておそれと素直に国連加盟を承知するとも思えず、それだけに世界各国は今後一層真剣に世界平和実現を目指して、その道を探し求めなければならない。

8) 高島善哉編「改訂社会科学講義」6頁以下。

高島善哉・水田洋・長州一二共著「社会科学はいかに学ぶべきか」163頁以下。

現在要請されている全体科学は人文科学、社会科学、自然科学の三系列の学問を新しい哲学を軸に統合したものであるが、実際にはまだその段階に至っていない。将来はその方向にあるとしても社会諸科学の統一科学としての社会科学さえ明確化されていないのが現状で、さしあたって社会科学の確立が今日の急務である。かつて自然科学が市民社会創出に指導的役割を果たした如く、今日名称は兎も角として一応社会科学が全体科学の主導権を担う使命を有していると解するべきであろう。

9) 高島善哉編、前掲書、9頁。

が高まれば高まる程不安克服のために、将来に対する全体的な見通しが可能な統一科学、全体科学としての社会科学が強く要請されてくる。人間的自己疎外の回復を目指して人間として自主的であろうとすればする程、「それだけに世界的な場面における人間のあり方こそ、すべての人間が直面しなければならない、最大の課題」¹⁰⁾であり、今日では只単に各分野での専門人的、技術人的状態に留まる生き方は許されず、全人的な在り方が強く要請されているのである。現代という時代は科学も全体科学が切実に欲求され、それだけに人間も全人的なものが強く要望される時代であるが、先ず人々の心の抛り所、生きる指針として全体を包含する所の全体科学としての社会科学が確立されねばならない。それは終局的には社会機構そのものに根底から影響を与えずにはおかないもので、この意味から全体科学としての社会科学は畢竟するに新しい哲学と諸科学の融合統一によって生れるものであり、¹¹⁾セリグマンが言う如く単に社会諸科学が専門的に発達すれば相互に関連する問題が増加してくるとか、又深い結論が得られるからとかいうが如き単純な外面的な理由からではない。¹²⁾人間の歴史を概観しても全体を包括する所の原理的指導理念は、簡明直截ではないにしても何時の時代でもその時代の社会的、経済的生活の歴史的諸段階に即応した内面的要求に沿って生れているのである。¹³⁾ヘーゲルは始めて哲学史を統一的な認識過程として考察したものであるが、彼の「哲学史」の結論として「まず第1に、あらゆる時代を通じてただ一つの哲学があった。そして同時代における種々の差別は、ただ一つの原理の必然的な諸側面をなすものである。第2に、哲学的体系の順序はけっして偶然的なものではなく、この学の発展の必然的な順位をあらわしている。第三に、ある時代の最後の哲学は、この時代の発展の帰結であり、精神の自己意識が自己自身についてあたえた最高形態をもった真理である。」¹⁴⁾と述べている。この観念論的図式主義はそのままでは受け入れられぬにしても、弁証法的方法による客観的統一的法則性を見出さんとした彼の遺産は貴重にして重要である。各時代の社会発展の推進力として統一的全体科学が要請されるのは、生産力増大に伴う社会機構の内的矛盾の拡大によって、人々の間に社会不安が生れ次第に危機意識に変じて、これが高まってきた時で、いわば社会機構の変革過程において新社会の誕生を準備する役割を果たすためである。つまり我々は社会的人間であると同時に歴史的人間でもある。人間が主体となって歴史をつくるのではあるけれども、その意識はその時代の社会的、歴史的諸条件を反映するものであり、生産力の発展諸段階に照応する各時代の支配的生産様式に対応している。されば社会変革期において危機意識が高まれば高まる程新時代に合致する「歴史的なものと論理的なものの一致」する原理的な指導理

10) 大河内一男、貝塚茂樹、永井道雄監修、前掲書、16頁。

11) 哲学は世界観であると同時に方法論でもある。個別科学を全体的に統一しながら、「導きの糸」として光明を与えつつ水先案内の役目を果そうとするもので、いわば個別科学の真理の総合として成り立つものである。(高橋庄治「ものの見方、考え方」228頁以下) 従来は学問が専門化、細分化されて純粋化、形式化した結果「木を見て森を見ない」、「鹿を追う獺師山を見ず」の例えの通り、全体性を忘れた憾みがあり、そのため哲学は個別科学に圧倒されて全体、総合、統一を見失ってきた。個別科学にも夫々「固有の法則」はあるにしても、(大塚久雄「社会科学の方法」64頁以下) それらの特殊性を超越して共通性を発見し、普遍化が行なわれて、哲学と諸科学の融合統一による全体科学、世界科学が確立される必要があり、それは今日の急務となっている。

12) 宇野弘蔵「社会科学のために」3頁以下、同「社会科学はどうして出来たか」(「社会科学基礎講座」(II)所収、1頁以下)

13) 極めて大ざっぱには原始社会では魔術＝呪術、古代社会では古代ギリシアにおいて哲学(万有科学、万学の女王)、支那において学問、中世では神学、近代では啓蒙哲学、ヒューマニズム、自然法理念、特にアダム・スミスの経済学が重要な役割を果たした。以上の流れは(2)「研究の対象」において論及する。

14) ヘーゲル「哲学史」第3巻、第3篇(古在由重編「哲学史」11頁から引用)

念が求められ、この指導理念が大眾を掴んだ時に物質的な力となって新社会機構を支持し、支配的イデオロギーとなってその社会を発展させて行くのである。¹⁵⁾

(三) 学問の専門化

一定の社会機構の基礎が整い歴史の動きが国家目的に沿って一応順調にその軌道に乗っている時代、或いは多少の内在的矛盾が存在するとしても他国への侵略でそれらを隠蔽し、国民を欺瞞し得るような状態にある時代においては社会秩序は概して安定しており、人々は社会機構の在り方を通じて生きることへの大きな社会不安や、危機意識を抱く必要もなく、従って全体科学の必要性も自覚しない。¹⁶⁾ 事実、19世紀後半の資本主義社会の発展途上における相対的安定期において、経済学、政治学、法律学等の社会諸科学が著しく発達し、それらが専門化、細分化¹⁷⁾を通じて純粋化、形式化し各個別科学は相互間の緊密性を欠いて、夫々が独立科学、専門科学として分散＝孤立し、現実生活＝社会から遊離し次第に無力化して、有関性と非生産性を帯びるに至ったのである。¹⁸⁾

今日の学問が如何に各部門において専門化、細分化されているかについては各大学の要覧が証明する所であるが、勿論、学問の専門化、細分化にはそれ相応な十分の理由がある。第一は資本主義社会の分業原則の影響である。資本主義社会は自由主義、個人主義、営利主義の指導理念を3本の柱とする所の商品生産の社会である。全ての財貨は商品として生産される故人々は自己の商品を売ることによって自己の欲する商品を手に入れねばならぬ。売るべき商品を有しない者は自己の労働力(肉体的、技術的、頭腦的)を商品として資本家に売る外はない。かように資本主義社会では人間の社会的関係は商品売買という流通過程を通じて物

15) 各時代の支配者のイデオロギーがそれぞれの時代の社会の支配的イデオロギーとなるが、生産力の増大は社会機構を一定の状態に留めず、内的矛盾の拡大に伴って新たな指導理念を生み、ついにこれが支配的イデオロギーとして新社会機構の推進力となる。マックス・ウェーバーは歴史の推進力としてカリスマを重要視するが、これについては後述する。

16) ④ 今日の如く極めて世界が狭められた状態の下においては、例え一国が順調に発展し得るが如く見えても、現実には世界情勢から孤立して存在することは許されず、世界の平和と無関係には自国の平和も保障されない。ベトナム特需で日本経済は相当恩恵を蒙っているが、(安藤慎三、前掲書)反面日本の良心は非常にベトナム戦争に心を痛めているのであり、又この戦争に日本が絶対に捲き込まれないという保障はない。

④ 敗戦までの日本は社会の内的矛盾を侵略戦争によって覆い隠し、他国民の犠牲の上に不断の発展を続け繁栄を誇って来たもので、それが歴史の必然性であったとしても(京都学派の理論、特に高山岩男「世界史の哲学」、近年出版された林房雄「大東亜戦争肯定論」)、真に日本人に幸福をもたらせたものではなかった。しかし古老の多くは自分の殻に閉じ込めりながら過ぎ去った「良き時代」を偲んで、「昔は良かった」(戦前は家族制度で戸主に権威があったことも一因する。)と懐古趣味に生きている。

17) 住谷悦治「社会科学」100頁以下

同 「社会科学論」143頁以下

末川博「社会科学と学問の自由」(「社会科学講座」(Ⅱ)所収133頁以下)

高島善哉編、前掲書、22頁以下、同書第2部「社会科学の生成過程」

高島善哉・水田洋・長州一二共著、前掲書、163頁以下

宮島肇「哲学思想の歩み」25頁以下

19世紀から20世紀にかけて専門化した数学部門については竹之内脩「数学」(大河内一男編「学問と読書」所収37頁)参照。

18) 尾高邦雄「社会学の本質と課題」(上巻)91頁

と物との関係として間接的に現われるにすぎず、¹⁹⁾ この関係は技術革新に伴って生産力が増大すればする程激化され、「各個人は、いわば資本主義という大きな機械の部分品にすぎなくなるのである。」²⁰⁾ かかる資本主義社会の分業原則は単に生産部門のみならず社会全体の各分野へ浸透し、遂にはそれらを完全に包み込んでしまう。²¹⁾ しかも社会が高度化し複雑化すればする程能率化が要求されて、合理化と組織化はますます進み、これに対応して分業化＝専門化も深化し、人々の専門人、技術人としての性格もいよいよ推し進められて行くことになる。以上の事柄に関して学問の領域も例外ではない。資本主義社会の分業原則は容赦なく学問の世界をも巻き込んで、専門化させることによってますます発達させながら、同時に反面個々の領域を分離、孤立化させ、学問の断片化、技術化を促進して行くのである。²²⁾ 「経済学の父」と称されるアダム・スミスは個人が「利己心」に従って行なう自由な経済活動は最も合理的な経済的行為であり、社会全体としても神の「見えざる手」によって自ら調和せしめられると、自然法思想を基礎として政府が個人の自由な経済活動に対して干渉することを極力排斥したのであるが、それは「ことに、生産品をすべて商品として自由に取引したり、労働力を商品化したり、生産過程を無政府状態において自由競争をさせたりするには、政治と経済と法律というようなものを全く絶縁した形にすることが便宜であり必要であった」²³⁾ からである。第2に資本主義社会がその発展に伴って高度化し複雑化すればする程、それを反映した社会的歴史的現象に対応して、有限な人間能力では無限な社会現象の解明は何人にも許されないという人間的制約の

19) 資本主義社会は資本制的生産様式の経済法則が支配する商品生産の社会である。生産者は不特定の需要者を想定し、販売して利潤を得る目的で商品を生産する。消費者は不特定の供給者からの商品を購入する。社会発展に伴う人口増加、大量需要、交通・通信機関の著しい発達による市場拡大、大量供給は売買の円滑化(国民経済生活の円滑化)促進のために生産者と消費者の間に多数の商業者を介在させると共に、機関商業をも発達させ、かつては同一人であった生産者と消費者を距離的、時間的更には季節的にますます分離、隔絶せしめる。又資本主義発展に伴う株式会社の発生によって以前は同一人であった資本家と経営者も株主(出資者)と企業家に分離する程資本主義社会の烈しい分業原則は社会全体を包み込んで、専門化過程が進めば進む程社会関係は商品を媒介としてますます間接的にならざるを得ない。

20) 高島善哉編、前掲書、23頁

資本主義社会が高度化、複雑化する程専門人的、技術人的性格は強くなり、特に生産部門では資本の有機構成の高度化から機械化が進み、生産工程の分業も流れ作業になる程、人間の機械に対する主体性が転倒して、機械の部分品の性格が濃厚となる如く見える。

21) 高島善哉編、前掲書、23頁以下

水田洋「学問の自由」(高島善哉・水田洋・長州一二編、前掲書、所収232頁以下)

林直道「マックス・ウェーバーの思想体系」9頁以下

モンテスキューの「三権分立」思想も例外ではないし(末川博「社会科学と学問の自由」『社会科学講座』(II)所収)世間一般の通念になっている政府の各省、官庁の各部それぞれ不統一で、架橋にしても建設省関係、農林省関係等あり、横の関係不十分なるはその一例である。

22) 所謂「近代経済学」はマックス・ウェーバーの方法論と類縁関係にあり、彼が「近代経済学」に対して方法論的基礎づけの役割を果たしていることは否定し得ない。(林直道、前掲書、96頁以下)方法論は基本的には資本主義社会を肯定するか否かによって決定し、肯定の市民社会の立場に立てば「近代経済学」の如く技術的利用の学問にならざるを得ないし、市民社会を超えて世界の人間社会の立場に立てばマルクスの「資本論」(経済学批判)の如く「原理」的なものにならざるを得ない。(杉本栄一「近代経済学の解明」—その系譜と現代的評価— 63頁、宇野弘蔵、前掲書、147頁以下)マックス・ウェーバーの「理想型」が「原理」的なものであるか否かについては後述する。

23) 末川博「社会科学と学問の自由」(『社会科学講座』(II)所収、137頁)

理由によって、学問も専門化して精密研究を行なうことが要請され、個別科学さえ水も洩らさぬ如き精密高度な研究がなされる程専門分化してきたのである。第3に資本相互間の激しい自由競争と同様に科学者相互間のきびしい生存競争である。これに敗れないためには科学者の専攻がますます細分化し、そこで固定化する傾向になることは避けられない。「当然、仕事の範囲はごくせまいものとなり、労働者の仕事よりは質の高いものにせよ、ひろい意味では一種の部分労働者という状態におちこんでしまう。」²⁴⁾ 学問の専門化、細分化、精密化はそれ自体学問の大いなる発達を意味するものではあるが、反面純粋化、形式化への道を辿って全体性を見失うなどの弊害も生んだのである。

(四) 学問の純粋化、形式化の社会的、経済思想的背景

やむことなき利潤追求を目的とする商品生産の資本主義はイギリスを母国とし、イギリス資本主義をモデルとして生成発展してきた。アーノルド・トインビーが「産業革命」(The Industrial Revolution) と呼んだ、²⁵⁾ 歴史過剰は1760年代から1830年代にかけて展開した。資本主義の生成には国家の強力な力が必要であり、ピューリタン＝名誉革命によって絶対主義体制を打ち倒したイギリスでは、議会在絶対的な力による暴力を以て資本の原始的蓄積の過程を推し進めていった。この過程においてひとたび資本主義の生産方法の前提諸条件が整いこの生産方法が確立してくると、今や国家の強力な暴力＝政策に頼る必要もなく自らの資本主義経済法則に従って、利潤追求を行ないながら拡大再生産の自律的發展運動を繰り返していくようになる。ここにおいて産業資本は最早や政府の政策による保護は不要になったばかりか、却って障礙と感じ、「安撫な政府」＝「夜警国家」(ラスキー)と「自由放任」を求めて、彼等の生みの母たる国家からの自由解放を叫ぶに至る。「古典経済学の祖」アダム・スミスはこの時に当り敢然として政府の一切の干渉を排撃して重商主義的統制に反対し自由放任、自由貿易を主張したのである。²⁶⁾

イギリス資本主義は1820年前後にその発展の基礎を固め「世界の工場」としての覇権を確立したが、同時にその胎内には既に内在的諸矛盾を醸成し、生産力の発展と平行して一方には資本の集積と集中とが進行し、他方では農民の窮乏と労働者の惨状が日に増し深刻化し、イギリス資本主義の将来に暗影を投げかける社会問題として、良心的人道主義的インテリゲンチヤの関心を強く惹き始めていたのである。²⁷⁾

24) 星野芳郎「技術と体制」(岩波講座「現代」2所収、256頁)

かかる傾向は科学技術の加速度的発展によってますます技術革新を要求される自然科学者にはげしい。

(同上)

25) 小原敬士「資本主義入門」69頁

26) アダム・スミスの「国富論」が出版された1776年当時は未だ資本主義の生成過程で、手工業、家内工業が尚強い勢力を有して、徒弟法、ギルド制度も温存されており、又重商主義制度も固執されて資本主義経済体制への発展を妨げていた時代であった。(出口勇蔵「四訂 経済学史」巻末「各国別経済学発達年表」参照) スミスの自由放任、自由貿易は「世界の工場」として生成、興隆しつつあるイギリス資本主義＝産業資本の要請の卒直な表現であり、同時に全人類的な形で市民社会全般を合法的に把握し解明したものであった。彼の経済学の中を貫流する根本思想は資本主義の生成発展過程を通じて指導理念となった。この意味において彼の経済学は単なる経済学ではなく、それを通じて全体科学性にまで発展したのである。「(相沢秀一「アダム・スミス国富論」)(末川博・外「社会科学への道標」(所収100頁以下))」スミスが実際には「自由貿易論」と紙一重の重商主義の主流である「貿易差額論」を手痛く非難する理由については大河内一男「経済思想史」第1巻55頁以下参照。

27) T. S. ASHTON「The industrial revolution」(中川敬一郎訳「産業革命」)

大河内一男「続社会思想史」(改訂版)1頁以下 河合栄治郎「社会政策原理」(上巻)84頁以下
産業革命は古い経済秩序を短期間に根底から掘り崩し、社会生活に根本的変革を与えた。一方におけ *

スミスは資本主義の「永遠の繁栄」を夢見て此の世を去ったが、スミスの継承者マルサス(『人口論』1798年)に至ると資本主義の前途に不吉なものを予感して悲観論的となり、更に古典経済学の完成者となったりカード(『経済学および課税の原理』1817年)の経済学に至っては「陰気な科学」＝dismal science(カーライル)とならざるを得なかった。スミスとリカードの差は1776年と1817年の差であり、産業革命前夜とその一応の完結の時期の差であり、生産から分配への推移であり、「リカードの経済学にとっては、もはやスミスのように、いかにしてより多くの富を生産し蓄積するかが問題ではなくなり、富の社会的分配についての秩序を、とりわけその対立する利害の関係を、分析することが経済学の主要な任務になっていた。」²⁸⁾マルサスは社会問題の根源を貧民の増大と彼等の窮乏にあると認識し、リカードは富の分配秩序において抜き難い矛盾と階級利害の対立が隠されていることを認識したが、彼等は自然的秩序を信奉している限りにおいて社会問題は人為的に解決し得ないと信じており、又人為的なすべきでないとして繰り返し述べたのである。²⁹⁾併し産業革命進行途上において甘い期待が事実によって裏切られてくると社会思想も一方に資本主義的な「市民社会」擁護を目的とするものと、他方にリカードの労働価値説に多くを依存しながら資本主義を批判し克服することによって、矛盾を解決せんとする「リカード派社会主義者」(Ricardian socialists)が現われ、資本主義的社会思想と社会主義的なそれとに分裂、対立して行くのである。³⁰⁾

資本主義の矛盾の表われとして1825年に初の循環性経済恐慌が勃発した。1832年には第1次選挙法改正が行われてイギリス・ブルジョアジーは支配権を確立した。かくして1830年から40年代にかけてイギリスは完全な資本主義社会となった。従来労働者階級は「資本と労働」との一応の共同利益のために封建勢力(土地所有者)に対して政治的尖兵として共同斗争を行ってきた。又「この共同の利害の存在に疑惑をもち警戒をしながらも、1848年の2月革命までは、まだそれに棄て切れぬ期待をかけていたことも否定できなかった。」³¹⁾併し実際には1824年に結社禁止法が徹底されると資本主義制度の枠内だけの経済的斗争から、独自の階級的政治的プログラムをもってブルジョアジーを直接斗争の相手とする労働組合運動が盛んになったのである。³²⁾

1832年の選挙法改正によって土地所有者は敗退しブルジョアジーの発言権は急激に増大したにも拘らず、同盟者の労働者階級には選挙権は賦与されなかった。1833年には工場法が改正されたが、これとて監督制度が規定されただけにすぎず労働者階級に益する所はなかった。1834年には救貧法が改正されて純粋な窮民を除いて、他の下層労働者の救済と保護の打ち切りが宣言された。それはマルサスの貧困の原因は社会制度

* 富の集積は他方における貧困の蓄積で18世紀末には、「労働組合運動(trade unionism)は、もはやばらばらのまた一時的な組織ではなく一つの社会運動として顕現していた。」(前掲『産業革命』144頁)。1812、3年には機械破壊運動も大衆化し、産業革命の進行過程において甘い期待が裏切られてくると社会問題を主題にした書が表われるようになった。(出口勇蔵編『四訂 経済学史』475頁以下の「各国別経済学発達史年表」参照)

28) 大河内一男『続社会思想史』(改訂版) 45頁

29) 同 『経済思想史』(第1巻) 247頁

30) 同 『続社会思想史』(改訂版) 2頁以下

環境が人間に及ぼす影響を認識し、社会政策が云々され始めるのは18世紀末から19世紀初頭にかけてである。(河合栄治郎『社会政策原理』(上巻) 101頁以下)

31) 大河内一男 前掲書50頁

32) 1830年代までのイギリス労働運動はオーエン主義によって観念的に描かれた「かくあらまほしき社会」実現のためのものであり、結局は単なる「空想的社会主義」として失敗した。(住谷悦治『社会思想史』27頁以下、大河内一男、『社会思想史』(改訂版) 146頁以下、木村健康『19世紀英国思潮』“社会思想研究会編『社会思想史十講』”(下巻) 所収299頁”

の罪に帰せらるべきでなく、貧民自らの責任であって、彼等は社会に対し救済を要求する権利なしと言う理論に拠っていた。ここに至って労働者階級は永年の同盟者であるブルジョアジーの相次ぐ裏切りに憤激し、自らの組織と力によって彼等自身の意思と利益を議会に反映させんとし、普通選挙権獲得のために、1836年（1848年まで）イギリス労働者の大部分を動因した世界最初の大規模な組織的社会運動としてチャーティスト運動（Chartist movement）を展開するに至ったのである。³³⁾

1848年という年はヨーロッパにとって多事多難の年であった。前年から恐慌が始っていたイギリスでは1月にマルクス、エンゲルス共同の「共産党宣言」が発表され、フランスでは2月革命、プロイセンでは3月革命が起って革命的ムードが全ヨーロッパを被っていた。これらの影響は1846年の穀物条令で物価低落を来たし失望させていたイギリス労働者を大いに刺激して、この年にその未熟さを暴露して空中分解をとげるチャーティスト運動を最後の一大運動へと発展せしめた。最早や資本主義の矛盾から生ずる「資本と労働」を軸とする社会問題はマルサス、リカードの如く諦観的悲観論的態度ではすまされなくなってきた。この時に当り労働運動の興奮のさ中にJ・S・ミルの「経済学原理」が市民経済学の悩みの表現として公開されたのである。

マルサス・リカードは資本主義の矛盾と社会問題は認識したが、経済の「自然的秩序」を信頼するあまり積極的に解決しようと努力しなかった許りか、人為的にそれをなすべきではないと説いた。しかしJ・S・ミルはブルジョアジーと労働者階級の両者間の対立的要求を程良く調和せしめんと試みる。1848年の社会情勢は18世紀末のそれとは本質的に異なった混乱と動揺であり、それだけにミルもさまざまの思想的影響を受けて³⁴⁾ 自由主義、功利主義を継承しながら、反面社会を歴史的、動態的に観察して労働者階級、社会主義に極めて同情的であった。それにも拘らず結局は自由主義を捨て切れず社会主義を永遠の未来に押しやり、³⁵⁾ 資本主義の枠内における社会改良主義に留まって、リカード以後の労資協調論のマルクスの所謂「俗流経済学」の先駆としての学問体系ばらばらの妥協的折衷学説とならざるを得なかった。³⁶⁾ 市民社会の指導理念としての社会科学的作用を果たしてきた古典経済学はミルにおいて行き詰まり、古典経済学に自ら破産を宣告することによって社会科学の性格を失い、専門科学としての経済学となったのである。³⁷⁾

33) 大河内一男 前掲書244頁以下

当時の労働者は未だ彼等の思想的拠り所であり、理論的武器である所の彼等自身を歴史発展の直接担い手＝主体とする「経済学」を有しておらず（マルクス「資本論」第1巻の刊行は1867年）、寧ろ「働く貧民」（labouring poor）であって労働者階級という統一意識、組織も未熟で、彼等の社会運動も永年の同盟者なるブルジョアジーが、彼等を利用して自らはますます経済的、政治的に強化して行くに反し、彼等の社会的地位は依然として改善されず、常にパンを求めて石を与えられるという不満の表現に外ならず、そのためチャーティスト運動にしても結局は分裂し腰砕けとなって空中分解するのである。

34) 大河内一男 前掲書265頁

同 「社会思想史」（改訂版）225頁以下

35) J・S・ミル著、石上良平訳「社会主義論」141頁

36) マルクスはJ・S・ミルを俗流経済学的弁護論者と混同することは全く不当であると評価している。

（マルクス著、長谷部文雄訳「資本論」第1部下（2）青木書店版949頁）ミルの経済学が折衷的にならざるを得なかった理由については 大河内一男、前掲「社会思想史」222頁以下、「統社会思想史」85頁以下参照。

37) 大河内一男 前掲書85～6頁

スミスは当時のイギリス資本主義が生成興隆期であったことから社会問題が起っても一時的な過渡的現象で、資本主義の発展と平行して消失して行くものと信じており、重商主義政策に対しては痛烈に批判を加えながら、資本主義の将来に対しては極めて楽観的であり、そのため彼の理論も「生産」が中心的課 *

1825年に勃発した恐慌はイギリス一国のみを襲ったにすぎなかったが、1836～7年、1847年と次第に範囲を拡大し、1857年の恐慌に至って遂に「世界経済恐慌」の時代に入り、1873年の恐慌以来ますます激しさを増してきた。資本主義的矛盾の世界的拡大に伴って労働運動も烈さを加えて国際的な広がりを持つようになり、1864年には第1インターナショナルが結成され、1871年にはパリ・コミューンが設立された。従来の恐慌は比較的早期に回復していたが、1873年の恐慌に至っては今までイギリス経済の主要な顧客であったアメリカ・ドイツ等の経済も充実し、³⁸⁾ 両国共に不景気に見舞われていて経済が容易に回復せず、資本主義の内在的矛盾はいよいよ露わになってきた。ミルにおいて行き詰った自由主義を基調とする「古典経済学」の後を受けて、自然的調和観は現実的認識に非ずとして概ね3つの潮流が生れた。1はローマン主義思想、2は社会主義思想、3は社会改良主義（修正主義）思想である。³⁹⁾ イギリスにおけるミル以後の経済学は1890年にマーシャルが不朽の大著「経済学原理」を出版してケンブリッジ学派の新しい思想体系を確立し、経済思想史上新時代を画するまで、「古典経済学における古典的性格やミルにみられた社会的良心をうしななうて、しだいに俗流の現状擁護論と原典註釈学に墮落してゆくのである。」⁴⁰⁾ このような事情は当時のイギリスの社会的背景に対応している。⁴¹⁾ ミル以後指導的役割を果たして主流になるのは社会改良主義と結合し、それを最もよく体系的に代表している「歴史学派」経済学である。⁴²⁾ 古典派が資本主義の一般の原理とし

* 題であった。マルサス、リカードに至っては当時の資本主義の社会問題が「資本と労働」の対立的関係から生ずる貧困にあるとして「分配」中心に移行したが、自然法則的秩序を信ずることから社会問題は近代社会に不可避な宿命として受け取り、諦観的、悲観的となった。スミス、マルサス、リカード等が共通して社会的諸問題を資本主義の内在的矛盾の表われであるとして理解しなかったのに対し、J・S・ミルは資本主義社会を歴史的、動態的に見て「資本と労働」の調和を計らんとする。彼は生産と分配を区別し生産的秩序は自然的、物理的で不変性格をもつものであり、分配的秩序は社会の法律、慣習等による人為的、可変的なものであるとするなど、結局は自由主義の殻から脱し得ず折衷的不統一な学問体系となって行き詰まるのである。（生産と分配は不可分でいかに生産するかによって分配も決まるもので、両者は歴史的、社会的なものである。）彼の経済学の行き詰まりはイギリス資本主義の行き詰まりを代弁するものに外ならない。リカードの時代は「資本と労働」は法則的には対立しても、まだ両者は封建勢力に対して共同の利益目標を掲げて共同斗争を行ない得たが、ミルの時代にはブルジョアジーの相次ぐ裏切りに激昂した労働者階級は、自らの組織と力によって社会的地位の改善と利益を獲得するために、ブルジョアジーを直接の相手として公然と斗争を行なう程成長していたのである。

38) フランス、ドイツ、アメリカ、日本の産業革命については小原敬士、前掲書69頁以下参照。

39) 大河内一男「経済思想史」第1巻39頁以下、第2巻2頁以下、同「統社会思想史」（改訂版）110頁以下。

ローマン主義思想は経済思想は持ち合せていても資本主義経済機構の分析論としての経済理論を有していなかった理由からここでは省略する。社会主義思想の場合その系譜は複雑であるが、主流は哲学的、経済的諸思想を批判的に摂取して「科学的社会主義」を展開したマルクスである。彼の理論は資本主義社会の支配的イデオロギーでなくその批判の科学で社会科学としての原理的性格を有しており、学問の純粋化、形式化と一応無関係故これも省略し、(3)「研究の方法」において考察する。

40) 同 前掲書100頁。俗流経済学については越村信三郎「経済学史」123頁以下。178頁参照。

41) 大河内一男 前掲書108頁以下 同 「社会思想史」223頁。

木村健康「19世紀英国思潮」（「社会思想史十講」（下）所収298頁以下）

42) ミルと歴史学派の社会改良主義（修正主義）には共通点がある。いずれも資本主義の枠内で内在的矛盾を解消せんとする。ミルは分配的秩序は人為的に修正可能であるとして古典派理論の自然法則に対して一つの突破口をつくった。歴史学派は経済全体が時と所によって異なると自然法則そのものの全体を拒否し、経済生活全体が修正可能な秩序とした。（大河内一男「統社会思想史」113頁）

ての自然法則的経済理論によって自由放任、自由貿易を主張したのに対し、歴史学派はドイツ資本主義の後進的特殊性に基づく国民的要求から経済法則を歴史法則として、経済生活は歴史的社会的な相対的なものであるから「修正」可能なりという立場から、国民主義保護貿易を提唱したのである。古典派理論が歴史的社会的諸条件を異にするドイツにおいては、そのまま適用され得ないという方法論的反省から生れたものであったが、それはドイツ観念論の歴史哲学的思想の影響によるものであった。⁴³⁾ この方法論的問題はメンガーやウェーバーに受け継がれシュモラーとメンガーの「方法論争」、シュモラーとウェーバーの「価値判断論争」等へ発展するのである。ともあれ1860～70年代は世界資本主義の発展に照応して経済学の歴史においても一大転換期であり、資本主義の内在的矛盾の認識方法と程度においてオーストリア学派（Die Oesterreichische Schule）ローザンヌ学派（L'école de Lausanne）ケンブリッジ学派（The Cambridge school）マルクス学派（Marxian school）等の諸学派が殆ど時を同じくして生れたのである。⁴⁴⁾

19世紀を通じての最大の歴史的事実はプロレタリアートの抬頭であり階級的対立であったが、併し資本主義諸国が植民地侵略、相互貿易、資本輸出等で対外的に発展し、獲得された超過利潤、超過利子の一部を労働者階級に「獅子の分け前」として分与し、又買収し得た限りにおいて、「資本と労働」は国内的には経済的に対立しながらも対外的には共通の利害に立っているという観点から、一応国家間の平和＝安定性＝同質性を保持することが出来たのである。⁴⁵⁾ かかる社会的背景に対応して「現状弁明的な態度の一般化は、社会科学や人文科学の全領域におよぶ風潮」⁴⁶⁾ となり、勢い全体的見地からはなれて社会現象の分析用具として現状分析に終始するに至って、学問の専門化の進行は次第に純粋化、形式化をもたらすのである。⁴⁷⁾

（五）学問の純粋化、形式化とそれに伴う弊害

学問が純粋化、形式化するということは社会の原理的、本質的なものを探求説明するものではなく、現象的、量的なものを分析説明するということを意味する訳で、社会の一応の安定期には将来への社会不安も不要であり、生きる不安も生じない故現状維持の態度で現象分析を行なっておればよいということになるのである。かかる理由において19世紀後半の一応の安定期において諸科学は夫々の分野においてつぎつぎと独立科学として分化して行ったのである。マルクスは資本主義社会の内在的矛盾は社会主義社会へ移行することによって解消され、プロレタリアートを解放することによって同時にブルジョアも解放され、人間的自己疎外の回復がなされると説いた。併し先進的資本主義国では国内的に「資本と労働」は法則的経済的に対立しても外対的に発展し続けることが出来て、両者は或る程度利害の共通性に立って協調し得たと言う理由から、

43) 馬場啓之助「経済学方法論」100頁以下。

44) 杉本栄一 前掲書37頁以下。

これらの諸学派は一は社会問題は資本主義の枠内で解消させ得ると説き、他は社会主義へ転化することによってのみ可能と主張し、基本的には資本主義の擁護と否定とに対立する。

45) 細野武男「19世紀の社会と思想」（末川博・外「社会科学への道標」所収164頁以下）

特にイギリスの労働運動が温和的なことについて木村健康、前掲書298頁以下。大河内一男「続社会思想史」（改訂版）191頁以下参照。

46) 大河内一男 前掲書108頁

47) 現代の如く社会の大変動期にはイデオロギーを全く無視して通ることは不可能であるが、（社会問題が激化し深化すればする程イデオロギーを避けて純粋化せんとする傾向あり）一応の安定期には現状維持の現象分析を行なっておればよいという理由から学問は純粋化、形式化し、而も社会が高度化し複雑化すれば実践的課題を解くために一見実践から迂遠と思える理論的分析用具の迂回生産もやむを得ない。（杉本栄一 前掲書66頁）

マルクス主義は余り普及せず、⁴⁸⁾ 現状維持的或いは修正主義的理論が資本主義のイデオロギーと結合して支配的学問として君臨してきた。資本主義の内在的矛盾が拡大して階級的対立が激化してくると国家権力の弾圧は学問の領域にも及び、遂には学問を国家目的の手段たらしめんとするに至り、ペンは剣より強くても国家権力には勝つこと能わずして、学問は次第に国家の下僕と化して行くのである。⁴⁹⁾ ここにおいて学問の純粋化、形式化は資本主義社会の内在的矛盾の拡大に対して目を覆い、現実逃避という形で一層進行して行くのであるが、⁵⁰⁾ 同時に他方では当時の社会的背景の下に消極的にはあったが、良心的自由主義者の学問の自由を確保するための最後の砦として一種の抵抗で真にやむ得ないものであったことも見逃がしてはならない。⁵¹⁾

学問の分化は勢い社会現象を全体から分離して孤立化させ、個別科学は独立科学としての専門科学たらんとして夫々独自の固有の法則性を求めて行く。その結果自分の対象とする社会現象を孤立的に捉えて非現実化させるばかりでなく、隣接諸科学との関連性も失うことになる。「さらに複雑な現実を自分の専門領域で純粋化し、理念化し、常識や実践から離れれば離れるほど科学性をもつかのように考えるに至ると、その科学の内容は次第に稀薄となり、形式化してゆくことは明らかである。社会科学の分化と形式化は相たずさえてすすむ。」⁵²⁾ 現実生活の全体性が忘れられてくると次第に学問は、狭い自己の専門領域に閉ち籠り「純粋法学」、「純粋経済学」、「形式社会学」など純粋化、形式化し、⁵³⁾ 「生活のための真理」から「真理のための真理」、「学問のための学問」、「科学のための科学」、「理論のための理論」という「学問至上主義」（主知主義 intellectualism）に陥入って現実＝社会生活から遊離し、ひとえに学問の研究者は世俗を超越して「象牙の塔」に籠り、真理の探求に専念することが使命であるが如く考えられるに至った。⁵⁴⁾ かかる現象はますます各分野の関連性を稀薄にして行くが、これは要するに諸科学の哲学からの遊離を意味すると同時に哲学のリーダーシップの喪失を示すものである。⁵⁵⁾

学問の専門化が進んで「純粋科学の観念論」⁵⁶⁾ が比重を占め、研究者が他の学問分野と没交渉で自己の特殊の領域のみに閉ち籠って研究活動が続けるようになると、学問は実践的性格を失ってその終局的存在理由をまったくの「気ばらし」、「手なぐさみ」の中に見出すに至って、「遊戯としてあるいは競技として」更には「お飾り的な」意義しかもたなくなった。⁵⁷⁾ 又学問の純粋化、形式化から技術的な面のみが重要視された結果は、法学に例をとれば法律知識を法の解釈技術によって悪用した例が実際に少なくないのであ

48) その時代の支配者のイデオロギーがその社会の支配的イデオロギーとなり、又階級的には対立しても一応の安定期には労働運動も温和的妥協的となったし、更に「資本論」の第一巻の刊行は1867年であったが、全ての発行が完了するまでには今世紀まで待たねばならなかったという如き諸事情によると考えられる。

49) 前掲 岩波講座「現代」（2）66頁以下。

50) 社会学について尾高邦雄「社会学の本質と課題」（上巻）91頁、「講座、社会学」、第9巻（「社会学の歴史と方法」）32頁、尚「高田社会学」については福武直「社会学の基本問題」250頁参照。かかる現象は全ての学問分野において妥当する。

51) 水田洋「学問の自由」（高島善哉・外編、前掲書所収234頁）

科学を価値判断から没却して実践から分離するという方法は、国家権力から学問の自由を守ろうとする精一ぱいの抵抗であったといえる。

52) 高島善哉・水田洋・長州一二共著 前掲書165頁。

53) 大河内一男「社会科学入門」30頁

54) 日本の場合、末川博「序・現代学問のすすめ」（末川博・外「現代学問のすすめ」所収13頁以下）。

55) 宮島肇 前掲書170頁以下

56) バナール著 坂田昌一・星野芳郎・龍岡誠共訳「科学の社会的機能」第一部141頁以下

57) 同上 144頁以下

る。⁵⁸⁾ 学問の専門分化はそれ自体としては時代に対応して当然の成り行きであり、又著しく学問の発達に貢献してきたのであるが、反面自分の専門領域から一步も出ない——他人の領域や常識については全く無関心ということから、「全体的な見透しをもたない、人間としても円満な良識や弾力性の欠けた片輪な専門家というもの、ぞくぞく現われてきた。」⁵⁹⁾ 19世紀後半から科学が戦争に利用されて学問が必ずしも人類の平和、社会の利益、人々の幸福のために使用されなくなると、研究者は只真理探求のために自己の研究のみに没頭することが唯一の与えられた使命で、その成果の利用は政治家の領分で研究者には関係ないという風が支配的となった。⁶⁰⁾ 併し広島、長崎両市に相次いで原爆が投下されるや、これが多くの科学者の良心を呼び戻し、改めて学問の在り方、研究者の学問的態度が反省せられるに至ったのである。⁶¹⁾

(六) 学問的研究的態度

そもそも人間は一体何を人生の目的に生きているのであろうか。真善美愛を究極目的とすることに異存のある人は少なからう。又大きくは精神的な生活に人生の意義を見出す人もあろうし物質的な生活に人間としての喜びを感じる人もあろう。これらは人それぞれの主観的価値判断によるものであって一言にして断定することは出来ない。目的によって元来人間は三つの方向の生き方をとると思われる。

1はその重圧に堪えかねて、それを忘却し、それから逃避せんとする方向であり（利己的快楽主義）、2はその苦悩を超越して宗教的信仰の道に入る方向であり、3はその矛盾や苦悩の原因、正体を突きとめ、それを理解することによって克服せんとする生き方である。⁶²⁾ 2と3の生き方についてその優劣を一挙には断じ難いが、現代の世界的、国内的諸問題から生ずる社会不安克服の道は、宗教的信仰のみによっては容易になし得ないように思える。⁶³⁾ 科学万能主義が陥入る弊害は厳に戒めなければならぬが、ポアンカレが

58) 末川博「学問への道標」（末川博・外「社会科学への道標」所収16頁）

59) 宮島肇 前掲書26頁

尚学問の専門化に伴う弊害については末川博・大河内一男「現代青年に訴う」228頁以下。高島善哉編、前掲書71頁以下。高島善哉・水田洋・長州一二共著、前掲書 163頁以下。林直道、前掲書9頁以下。又、オートメーションによる影響については前掲「現代」(2)13頁参照。

60) 同上26頁、大河内一男「社会科学をどう学ぶか」（前掲「現代青年に訴う」所収232頁）

ウェーバーの科学の「価値からの自由」（Wertfreiheit）＝科学と実践の分離理論がかかる風潮の大きな精神的拠り所を与えてきたことは否定し得ない。「監獄か軍隊か」何れかの道を選ぶ段になると結局は科学者の多くは国家目的遂行のために消極的、或る者は積極的に協力することになった。

前掲 岩波講座「現代」(2)73頁以下）

科学が戦争に利用され、学問がそれに協力したことについては只単に自然科学者のみの責任ではなく社会科学者、人文科学者全ての社会的共同責任である。（前掲「社会科学への道標」15頁以下、「現代青年に訴う」12頁、「現代学問のすすめ」15頁）

61) 既に1924年にはパートランド・ラッセル卿が科学の進歩が人類の幸福をもたらすよりも却って不幸を招く呪いとなるかも知れないと書き、「（現代青年に訴う」9頁以下）又それ以前から科学者の平和運動は広汎に精力的に行なわれて来たが、（豊田利幸「科学者の社会的責任」、岩波講座「現代」(2)所収57頁以下）、真に科学者が世界的規模で社会的責任を自覚したのは第二次大戦後である。（湯川秀樹・朝永振一郎・坂田昌一編著「平和時代を創造するために」、武谷三男・星野芳郎共著「原子力と科学者」『市民のための原子力』）

62) 宮島肇 前掲書13頁

63) 同上 32頁以下

社会の変革期には人々に社会不安深まり、救済を求める心情が高まる結果、各種宗教が続出し広まる。

「見よ、そして正しく見よ」、⁶⁴⁾ 又カントが「自ら思索し、自ら探求し自らの脚で立て、／＼」⁶⁵⁾ と言う如く、現代の激動する社会の諸問題を冷静に、真剣に合理的に把握しようとするならばおのずから科学的にならざるを得ない。⁶⁶⁾ 科学は生きる判断と選択の基準を提供してはくれるが、併し科学的方法は常に必ず自ら意識していないと無意識的に非科学的となる傾向がある。科学は既に認識されたものを対象として法則を追求して行くが、その場合哲学に依存しなければ一步も出発を開始することも出来ないし、又正しい法則性の必然性、普遍性も得ることが出来ない。蓋し科学は現象を対象とし因果関係を究明するが哲学の対象は理想であり当為であり価値であるからである。⁶⁷⁾ 「社会科学というものは、社会的人間の救済を科学の手に よって求めようとする意欲の持主であることを示している。」⁶⁸⁾ その場合「すべて学問的研究にたずさわる時には、論理学と方法論の規則の妥当性というものが、常にその前提になっている」⁶⁹⁾ のであって、これが忘れられて科学が一人歩きを始める と全体性を見失って行く危険性が生ずるのである。ここにおいて我々は学問の研究的態度の責任性を自覚する必要がある⁷⁰⁾ と同時に、科学と価値判断の問題は今日ますます重要な課題となってきたのである。ここでは科学への価値判断導入の是非については論及しないが、⁷¹⁾ 附言しておくならば確かに「知識は力なり」(ベーコン)で経験的な知識は自然征服に社会発展に大きく貢献するが、それが哲学を、世界観をもたない単なる「話の泉」式博識では意味がない。学問はあくまでも知識以外の何物でもないが、それが一旦自分で考え、整理されて自我の主体に立ち返り、主体性をもった自我を媒介として活動しなければ知識は只単なる知識に終わってしまつて学問たり得ない。⁷²⁾ 又学問は手段であり方法であるという理由から、安直な実用主義に堕することがあってはならない。勿論学問が独断的イデオロギーの道具に利用されるべきでないことは言うまでもない。ここで我々は一応学問の意義を明確にしておく必要がある。学問は単なる生活のためにあるのではなく、ましてや学問「それ自体のために」(for its own sake)存在するものでもない。⁷³⁾ 全ての人間の社会的自由を拡大し同時に各人の人格を成長させるものでなければならない。一部の人の利用されたり、奉仕したりするのは真の学問ではないし、又「不偏不党」を旗印に無節操な自主性欠くものは「物識り」ではあつても学問的態度ではない。学問は知識を体系化したものであるから全て価値判断を伴わないものは存在し得ない。更にいかに純粋科学であろうとそれは応用科学に連結するのもある。世界の平和を乱し人類に不幸をもたらしものであつては寧ろ呪うべき怪物でしかない。それだけに一層学問の対象と方法だけでなく目的も問われなければならないのである。⁷⁴⁾ 大局的には人類の平

64) 末川博・大河内一男前掲書5—6頁から引用。

65) 高間直道「哲学の基礎知識」73頁から引用。

66) 科学的態度といえども諸利害情況によって各種に対立する。

67) 河合榮治郎「学生に与う」(全)所収の中「学問」「哲学」「科学」の各項。

現象のみを分析する場合はさして哲学の力を借りなくても良いがマルクスの如く本質＝原理的な主張には哲学が欠かせない。

68) 高島善哉編 前掲書8頁

69) マックス・ウェーバー著・出口勇蔵訳「職業としての学問」(世界大思想全集29)「ウェーバー」所収146頁)

70) 高島善哉「社会科学の方法—総説」(高島善哉・水田洋・長州一二編 前掲書所収210頁)

71) ウェーバーは価値判断は主観なりとして科学の「価値からの自由」(Wertfreiheit)＝没価値性理論を熱心に強調し、マルクスは客観的価値判断に基づく理論と実践の統一を主張する。これらについては(3)「研究の方法」において論及する。

72) 河合榮治郎 前掲書「学問」の項

73) 同上 77頁以下。

74) 末川博・大河内一男 前掲書11頁 末川博・桑原武夫・湯川秀樹「現代の対話」160頁以下。

和と発展のためにこそ真理探求の学問が存在するのであり、然るが故に「学問をするということは、専門的な知識や技能を身につけるということのほか、全人格的にゆたかな人間として尊敬されるに値するような立派な人間を形成するために大きく役立つ」⁷⁵⁾ ものでなければならない。現代では専門化はやむ得ない現象ではあるが、これによって全体を忘れ自己の位置を見失うことがあってはならない訳で、社会変動期には何時の時代でも全人的なものが要請され、事実広汎な視野、高い教養をもった偉人が続出したのである。まさに現代は専門的知識、研究と併行して社会発展のために総合的観点から理解、把握されねばならず、そのために一層の全人的人物が要請されるのである。社会を正しく理解・把握するのが学問である限り、学問は常に社会の固定観念を打破して社会発展の「導きの糸」となるべき性格をもっているといえる。⁷⁶⁾ 併しそのためには学問の自由が保障される必要があるが、特に社会変革期には新旧の価値体系並びに利害の対立から往々にして圧迫、弾圧が行なわれる傾向があり、それだけに特に社会科学者は学問に忠実にならんとすればそれだけ大きな勇気が要求されるのである。⁷⁷⁾

75) 末川博「学問への道標」(前掲「社会科学への道標」所収17頁)

76) 藤本陽一・星野芳郎「社会体制と科学技術」(前掲「現代」(2)所収222頁)

77) 19世紀前半までの自由主義思想は急進的、改革的でその時代の特権階級に対し勇敢に斗争して来たが、ブルジョアジーが完全に支配権を握ると現状維持的となり、次第に労働者階級が抬頭して階級的対立が激化してくるに従い自らの利益と立場を防衛することに懸命となるに至った。